

系 車

編集 山形村ふるさと伝承館



街のあちこちには、
その地域の名前が書か
れた看板が多く立てら
れています。なぜこん
な名前が付いているの
だろうと、不思議に感
じたことは誰でもある
のではないでしょう
か。
今回は村内にある看
板から、その由来やい
われに触れてみたいと
思います。

上竹田「記念碑前」交差点の記念
碑って、何の記念なんでしょう。

地名にまつわる由来、いわれ

「記念碑前」 交差点

役場から北へ五百m余の五叉路、「記念碑前」交差点は、山形村でも交通量がかなり多い箇所、誰しもこの信号機上の看板を見たことがあると思います。この辻に「開道記念碑」と刻まれた大きな石碑が立っているのです、これにちなんで命名されたことまでは容易に分かります。

さて次の疑問として、どの道が開かれた記念なのかと浮かんできます。裏へまわって見ると昭和三年四月と

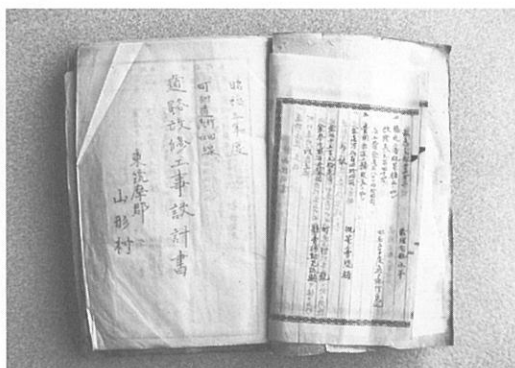
あり、時期は分かりますが、それ以上のは刻んでありません。そこで地域の方々に聞いてみた所、ここから川上屋さん北の御判形辻の区間だと教えてもらいました。また役場文書の中に、この工事関係文書が見つかり、史料の上からも裏づけることができました。

ちなみに、ここから役場東を通り、朝日村境横出ヶ崎までの道は、さらに後になって開かれた道で、昭和五年のことです。

石仏（いしほとけ）線

下大池の西沖団地から八幡神社の方へ延びる道路は、昭和四十六年頃に行われた耕地整理によって新しく開かれた道路ですが、「石仏線」という看板が立てられています。この道路沿いには道祖神も目立った石仏も無いのに、なぜ不思議に感じる方も居られるのではないかと思います。

団地北西端の十字路から山麓へ一つ目の五叉路には、文字も像も刻まれていないので目に留まりませんが、いかにも石仏といった高さ一m余の石が立っています。そしてこの辺には、「石仏（いしほとけ）」という古



▲ 昭和三年の道路工事関係文書（右：表紙、左：綴中的一项）

名が残っており、これが命名の由来になったと思われる。

なおこの石仏様の石、耕地整理前は横に寝ていました。この時、道祖神等の石仏が倒れてしまっているのではないかと掘り起こし調査をしました。予想と違い何も刻まれていなかった為、首を捻ってしまったとの



▼ 下大池石仏線の遠景（右）と五叉路辻に立つ石仏様の石（左）

ことです。しかしこの辺りが橋爪集落のはずれにあること、ここで三九郎を行っていたこと、以上から何も刻んでいなくても、整った石の形から靈感を感じお祭りしたのではないかと、石を立てたということです。またこの石、明治までこの周辺にあった長見寺（ちょうけんじ）の墓地へ葬送のため棺を運ぶ際、棺を置いて小休する石だったという言い伝えも残っているため、寝かしたままで良いという説もあります。

六部塚（ろくぶづか）線

小坂中原町の明治屋からセブンイレブンへ向かう道路、こちらには「六部塚線」という看板が立っています。こちらも塚は見当たらないのになぜこんな名前がついたのか、また「六部塚」って何の塚なのでしょう。

「六部」とは、諸国の霊場を巡礼しながら経を奉納する行脚僧のことと事典に出ています。この塚ということなので、行脚僧を弔った塚のことを言う様です。実際明治屋の辻には廻国納経供養塔があり、享保十九年（一七三四）の年号、上州甘葉郡藤岡村の地名、清浄淨心の願主名が刻まれています。地域の伝承には、巡礼の行脚僧がこの辺りまで来た時に歩行困難になったので、庵を作り



▲ 六部塚線の遠景（小坂中原町）

念仏を唱えていたが、しばらくしてここに果てたと言うのがあります。また「農村信仰誌」という本には、明治三五年頃までは塚が存在していたとの記述もあるそうです。よって明治の頃までは存在していた「六部」を弔った塚というのが、命名の所以になっている様です。

唐沢の「そば集落」

今度地名のいわれではありませんが、唐沢地区の「そば集落」を取り上げたいと思います。

村境の道路に立つ看板には、「江戸時代から受け継がれる手打蕎麦の味」とあり、古い歴史を有す「そば集落」です。しかしそば屋として商売を始めたのは太平洋戦争の頃から

で、ここ六十年間のことです。それ以前は精米やそば等の製粉を水車で行った集落で、製粉の主力が機械に移った戦後からそば屋を営む様になったとのこと。さていつの頃から水車を始めたかと言うことに移りますが、中信平水路配水池の西側辻に「車屋美人」と呼ばれる道祖神があります。これには弘化二年（一八四五）竹田村車屋中とあり、この時既に車屋（水車屋）が存在したことが分ります。またこの辻から山方へ百m位行った所には、馬頭観音の石仏が数多く祭られた箇所があります。これは水車屋が精米や製粉の依頼主の家へ、商品を運搬するために飼われた馬の供養であり、その古いものに天保十四年（一八四三）の馬頭観音があります。よって少なくともこの時には水車が動いていたということが分ります。

なお、山形村に長年住んでいる方なら違和感無いかもしれませんが、一般的には「そば集落」という言葉が耳慣れないと思います。実際インターネットで「そば集落」と打ち込み検索してみたところ、五十件弱のヒットしかなく、そのうえその七

割程が山形村唐沢地区の「そば集落」に関するものでした。全国的にも珍しい命名と言えるのではないのでしょうか。



▲ 唐沢地区の馬頭観音石仏群（右）と唐沢そば集落の看板（左）

なろう名竈遺跡の発掘



住居址が見つかっていました。この竈穴式住居址からは、当時の人が使っていた土器や石器も出土しています。

またこの竈穴式住居址の周りからは、食料を貯蔵したと考えられる穴もまとまって見つかっています。山形村は酸性土壌なので、貯蔵されていたものは土に帰ってしまい何も残っていませんが、野山で採ってきた木の实等を蓄えていたのではないかと推測されます。

また数点の土器片ではありますが、山形村ではほとんど見つかっていない縄文早期（約六千〜九千年前）の土器片も出土しています。

村では下竹田三夜塚遺跡や上大池淀の内遺跡、上大池洞遺跡等の縄文中期（約四千〜五千年前）の遺跡は数多く見つかっていますが、縄文前期の遺跡は、下竹田唐沢遺跡等限られた遺跡のみとなります。まして早期の遺跡は、松本平でもあまり見つからないものです。再開する調査で、こうした新たな発見も期待でき、村の歴史解明に新たな資料を加えることができそうです。

昨年の秋から下大池八幡神社裏にある名竈遺跡の発掘調査を始めました。この調査は「なろう原公園事業」に伴う緊急発掘調査で、工事を行うと壊れてしまう遺跡の記録を作成するためにを行っています。冬期間は積雪と凍結のため中断していますが、春から調査を再開する予定でいます。昨秋調査したのは一五〇〇㎡弱で、調査予定全体面積の七分の一程しかありませんが、この遺跡の様子が少しづつ判明してきました。

なろう原は山形村の集落側から見ると、左手が低く右手が高台になっています。これは谷から流れてくる沢の水が、なろう原の南側を流れることが多かった証拠で、人が住むには高台の北側の方が向いているということです。実際昨秋の調査では、今は埋もれてしまった沢筋の跡が見つかり、沢筋の間の高い箇所から縄文前期（約五千〜六千年前）の遺構や遺物が見つかりました。特に北側高台の方では、縄文前期末の竈穴式

出土した土器・矢尻（右）と見つかった竈穴式住居址（左）

